

# 共創型茶会のデザイン：地域工芸とデジタル技術による協働的文化体験の提案

伊賀 彩子\*<sup>1</sup> 伊賀 聡一郎\*<sup>2</sup>

Designing Co-creative Tea Gatherings: Collaborative Cultural Experiences through Local Craftsmanship and Digital Technology

Saiko Iga\*<sup>1</sup> and Soichiro Iga\*<sup>2</sup>

**Abstract** – This study proposes a co-creative framework for tea gatherings (“chakai”) that integrates regional crafts, digital fabrication, and interactive design. Departing from traditional tea ceremonies where hosts control the setting, our approach invites guests to collaboratively design utensils and space through the concept of mitate—reimagining objects with new meanings. Local materials are combined with technologies such as 3D printing and actuators to create interactive artifacts that enable remote or embodied dialogue. These practices transform chakai into dynamic, participatory experiences, connecting people and places beyond geographic boundaries. While this approach may challenge established norms of tea aesthetics and formality, it aims to respectfully reinterpret tradition through shared creativity. By shifting focus from consumption to collaboration, this work repositions local fabrication not only as economic activity, but also as a medium for cultural exchange and relationship-building. We discuss both the potential and limitations of merging intangible heritage with contemporary technologies in designing inclusive cultural experiences.

**Keywords** : Co-creation, Tea ceremony, Mitate, Digital fabrication, Cultural interaction

## 1. はじめに

### 1.1 茶道における共創の思想

茶道における「一期一会」や「一座建立」といった理念は、単なる様式美ではなく、場に集う者同士の関係や価値を重視する哲学を内包している。「一期一会」とは、「たった一度きりの出会い」という意味を持ち、人はもちろんのこと道具や場所に何度も向き合うとしても、その瞬間は一生に一度の機会であるという意識を呼び起こす<sup>[1]</sup>。これにより、参加者は目の前の出来事に真摯に向き合い、今この場に集中する姿勢を育む。また、「一座建立」とは、亭主と客、あるいは客同士が協力して、一つの空間と時間を築き上げることを意味する。これは、茶会がもてなす／もてなされるという一方向の関係ではなく、場に集う全員の能動的関与によって成り立つという本質を示している。たとえば、客が床の間の掛け軸や道具に込められた意味を読み取り、亭主との対話に応じて感応することは、一座建立を構成する具体的な営みである<sup>[2]</sup>。

茶道は伝統を継承するに留まらず、参加者同士の関係や共創的な空間づくりを重視する文化実践である。

その本質は、決まりきった形式に従うことではなく、常に新たな出会いや場の意味をその都度再構築するという創造的な営みにある。この観点は、現代における地域資源の活用や伝統工芸の実践とも深く響き合う。

### 1.2 地域資源と創造的实践

地域のなかにある資源を活用する取り組みは地方創生にもつながる可能性を持っている。宮崎県の自然や歴史をモチーフとした作品を制作するとともに、古窯の研究、後進の育成にも取り組んでいる陶芸家の泰田久史氏は著書で次のように述べる<sup>[3]</sup>。

伝統文化を作る活動は過去に向かうものではなく、さらにその場に留まらずに、ロボット作りのような最先端の技術へ、つまり未来へのものづくりにも繋がっている。

さらに、泰田氏は教育の観点から次のように述べる。

可塑性に富む粘土という素材は、子供たちが楽しんで活動しながら、主体的に創造性を育める教材となりえる。

このような素材との創造的なインタラクションを、地域に根ざした資源と結びつける試みは、地域文化の継承と発展の双方に資する取り組みとして重要である。茶道は、陶芸といった個別の工芸を包含しつつ、庭園、掛け軸、菓子、そして人々の所作など、多様な

\*1 宮崎学園短期大学 現代ビジネス科

\*2 エクスパーク合同会社

\*1 Department of Contemporary Business, Miyazaki Gakuen Junior College

\*2 XPARC LLC.

自然物・人工物が交錯する総合的な文化実践である。そのプロセスは、もてなす者と招かれる者の間の「場の創発性」を生み出すものであり、地域の文脈に根ざした創造的営為としての茶会の再解釈を可能にする。ゆえに、地域資源と伝統工芸、そして場のデザインが交差する実践は、地方創生や文化的イノベーションに向けた有力なアプローチとなりうる。

## 2. 本研究の目的

本研究では、茶道の本質を現代の文脈において再解釈し、地域資源・地域工芸とデジタル技術を用いた共創的文化体験としての茶会の再設計を試みる。

一般に茶会は、亭主による「もてなし」の印象が強い。本提案では、参加者自身が茶会の場に関わり、道具やしつらえに共同で関与する「共創型茶会」を構想する。これは、伝統文化の継承において、客体的な受容を超えて主体的な創造性を誘発する新しいインタラクションの実践でもある。

## 3. 関連研究

### 3.1 茶道における協働体験の構造

茶道は、空間、時間、道具、所作といった多層的要素が織り成す総合的なインタラクション体験である。「一期一会」の思想は、参加者がその場に集ったことの尊さに気づき、その出会いを慈しむ態度を促す。「一座建立」は、茶会に参加する全員が対話と感応を通じて、空間と意味を共に築き上げる関係を象徴する。

これは、現代のデザインの潮流における共創や協働の概念とも深く通じており<sup>[4][5]</sup>、他者とともに意味や体験を生み出す場の設計において、インタラクションやデザインの重要な視座を与えるものと考えられる。

### 3.2 見立てとデザイン

茶道における「見立て」は、ありふれたものや空間に新たな意味を与える創造的解釈である。たとえば、魚籠を花入れとして用いることや、朽ちた木片を香合に仕立てるなど、物の本来の用途を超えて美や意味を見出す行為である。これはデザインにおける「再文脈化」の行為と近いものがあり、既存のリソースに新たな意味を吹き込む創造的な行為である<sup>[6]</sup>。

本研究では、この「見立て」の行為を亭主側の演出にとどめず、亭主と客が相互に見立てを行いながら、意味を動的に立ち上げていくインタラクションの仕組みとして拡張する。このような相互見立てのプロセスを通じて、茶会は静的な形式ではなく、参加者全員によって意味が生成・更新されていく動的な場となる。

### 3.3 デジタルファブリケーションと地域工芸の融合

地域内で製品を製造・組み立てる「ローカルファブリケーション」が注目されている。これにより輸送に伴う二酸化炭素排出量を削減し、地域経済を活性化す

る効果が期待できる。農産物の加工・販売を含む第6次産業化のように、地域の産業活性化や雇用創出を目指す取り組みが全国で展開されている。例えば、鎌倉では里山保全活動の一貫として間伐材から皿や箸が作られブランド化され販売もされている<sup>[7]</sup>。

しかしその多くは、地域資源を商品化可能な素材として捉え、それを付加価値の高いプロダクトに変換し販売するという、いわば資本主義的な文脈に強く依存している傾向がある。つまり、資源が「売するためのモノ」へと還元される一方で、制作プロセスや場に関わる人々との協働や関係の構築は重視されていない。このような構造では、地域の文化的・無形的価値が消費されるだけに終わり、人と人との関わりを媒介とする文化的営みの再構築には至らない。

さらに、商材化を前提とした発想は、地域資源を外部マーケットに向けた観光資源として消費させる構造に陥りやすく、地域内での意味づけや創造的関与の余地が狭められる。結果として、ローカルファブリケーションが目指すはずの「地域に根ざした持続的な価値創出」が、資本主義的市場経済の中で限定的な成果にとどまる可能性がある。

本研究では、こうした一方向的な資源利用とは異なるアプローチとして、人と人が関係を結びながら共に場や意味を構築する茶会を媒介に、無形文化とローカルファブリケーション、さらにデジタル技術とを接続することで、文化的・社会的価値の共創を目指す新たな方向性を提示する。

## 4. 提案手法：共創型茶会のデザイン

本研究では、ローカルファブリケーションの従来の枠組みに見られる「商品化志向」や「一方向的な資源の流通」といった限界を乗り越え、人と人、人と自然、人と人工物が関わりながら文化的意味や体験を共に構築していく協働的实践の場としての「共創型茶会」のデザインを提案する。

ここでいう「共創」は、単なる協力的制作を超え、地域の資源（素材・技法）と参加者の感性や解釈が交差し、場の構成や意味づけが共同的に立ち上がるプロセスを意味する。そのデザインは以下の3つの段階から構成される。

### 4.1 道具と意味の共創：素材・記憶・技術の交点

従来のローカルファブリケーションでは、地域資源は「使える素材」として扱われがちであった。しかし本提案では、素材にまつわる文化的文脈を参加者が「見立て」を通して再構築するプロセスを重視する。

ここでは、単なる素材の再利用にとどまらず、デジタル技術による加工や、さらにアクチュエータやセンサ、ロボティクスを組み合わせることで、インタラク



図1 3D プリンティングされた花をロボットが持ち寄る  
Fig.1 Robot brings 3D printed flowers to tea ceremony.

ティブな意味生成の媒体としての「道具」を再定義することを試みる(図1)。たとえば、触れると静かに傾く花入れ、遠隔制御されて動く香炉、温度や湿度に応じて形状が変化する器など、物理的な振る舞いを通じて他者と非言語的な対話を促す人工物が、茶会の体験を新たな次元へと広げる。

さらに、こうした道具は、地域の素材・技術に根ざしつつも、遠隔地にいる他者との共有・協働を可能にする「開かれた文化的インタフェース」として機能する。地域にある素材や技術に込められた意味を、動いたり人と応答したりする人工物として作りかえることで、参加者は自分の想像力や感性を通じてそのものと関わるようになる。このようなプロセスは、道具と人との関係をこれまでとは異なる新しいかたちで築くための重要な手がかりとなる。

#### 4.2 空間の見立てと設え：場の意味の再発見

茶会において「空間」は、物理的な場にとどまるものではなく、参加者同士の関係や意味が立ち上がるための媒介として機能するものである。本研究では、茶会の場を伝統的な茶室に限定するのではなく、公園や商店街の軒先、学校の教室、さらにはデジタル空間など、多様な場所を「茶の湯の場」として見立て、再構成することを試みる。

従来は亭主が空間構成を一方的に担っており、空間の設えは固定的なものであった。本提案では参加者同士が空間づくりに関与することで、茶会という体験の形成に共同で関わる構造を目指す。これにより、「一座建立」という茶道の理念が、実際のプロセスの中に具現化されることになる。

#### 4.3 茶会の実施と省察：意味の生成と共有

完成した道具と設えた場を用いて、参加者同士で茶会を行う。この場では、茶を点てるという形式行為だけでなく、道具の制作背景や素材の記憶、空間への見

立てといった文脈的要素を語り合うことが中心となる。それにより、表層的な体験ではなく、共創された文化的意味を内包する多層的な体験として茶会が展開される。

これにより、形式化されがちな文化体験が、参加者の身体性・対話・想像力に根ざした「個別かつ共通の経験」として定着することが期待される。

## 5. 考察

本取り組みは、文化体験を「サービスの提供」ではなく「共に創る営み」として再定義するものである。ローカルファブリケーションは通常、地域内での循環的なものづくりを指すが、本研究が着目する「共創型茶会」ではそれにとどまらず、地域の資源を媒介として、無形文化としての茶道と接続し、さらにデジタル技術によって外部との接続可能性を広げる枠組みとして捉えている。

将来的には、茶器や茶室に用いられる形や構成、意味づけの背景などをデジタルデータとして共有することで、遠隔地にいる参加者がその思想や形式をもとに、自らの地域の素材や文化環境に応じて再構成するような協働が可能になる。たとえば、特定の地域の器のかたちや設計思想を、他地域の木材や植物、土などを使って翻案することで、物理的な素材を共有せずとも、文化的文脈を介した共創が実現できる。このように、設計思想や造形の型を共有し、それぞれの土地で異なるかたちで展開することは、地域資源と創造性の新たな接点を生み出す手がかりとなる。

さらに、地域で発生する間伐材を用いた可搬式の茶室構成や、建築廃材や漂流物などの不要素材を「見立て」によって茶道具やしつらえとして再解釈することで、従来の用途とは異なる文脈で地域資源に新たな意味を与えることができる。こうした工夫は、持続可能な素材利用にとどまらず、地域外からの来訪者にとっても、地域の自然や生活文化と触れ合う文化的インタラクションの契機となりうる。

このように、ローカルファブリケーションの枠組みを、無形文化・身体性・共創性と接続しなおすことで、地域を越えた人とモノと文化の交換が演出される場として茶会を再構築できる可能性がある。

茶道の持つ伝統の枠内にとどまらず、参加者自身が意味を構築していくプロセスは、他の伝統文化の再編集や、体験型観光、さらには教育現場における創造的学習のモデルとしても展開可能であると考えられる。

## 6. 今後の課題

本研究が提案する共創型茶会は、参加者全員が空間の設えや道具づくりに関与し、意味の生成においても能動的な役割を果たすという点で、茶道における「亭

主と客」の役割分担や形式的な作法とは一部で齟齬をきたす可能性がある。茶道は長い歴史の中で、厳密な所作や空間構成、美意識の継承によって洗練されてきた文化であり、その様式美や精神性を重んじる立場からは、本研究のような実験的・協働的アプローチは逸脱とみなされるおそれもある。

とくに、見立てや設えの自由度が高まることで、本来の文脈や意味の解釈が浅くなったり、儀式性が薄れてしまうといった懸念も無視できない。こうした伝統的価値との緊張関係をどのように乗り越えるかは、今後の検討課題である。

## 7. まとめ

本研究では、地域工芸とデジタル技術を媒介として、主客が共に場をつくりあげる共創型茶会のデザインについて提案した。見立ての概念を通じて、地域資源に新たな意味を付与し、動的・対話的な人工物や空間の設えを創出することで、茶会を一方的な文化体験から、関係の生成や意味の共創の場へと拡張する可能性を示した。

一方で、こうした実践は茶道の伝統的な作法や美意識と相反する可能性もあり、文化的文脈をいかに尊重しつつ再解釈するかが今後の課題である。今後は、実践を通じた検証や参加者の体験分析を進めながら、文化の継承と創造を往還する新たな共創のデザインのアプローチを探ってきたい。

## 参考文献

- [1] 千宗室: 「一期一会の基」, 淡交令和6年12月号巻頭言 (2024)
- [2] 千宗屋: 茶 利休と今をつなぐ, 新潮社 (2010)
- [3] 泰田久史: 『幻の小峰焼 (延岡内山焼) 地域創生と教育保育の視座』 (2023)
- [4] 上平崇仁: コ・デザイン, NTT 出版 (2020)
- [5] Norman, D.: *Design for a Better World*, The MIT Press, (2023)  
ノーマン, D., 安村通見, 伊賀聡一郎, 岡本明 訳: 『より良い世界のためのデザイナー—意味、持続可能性、人間性中心』, 新曜社 (2023)
- [6] 石野順子: 造形表現における“見立ての手法”に関する考察 デザイン手法としての視点から, 美術教育, 1995 巻 270 号, pp.20-30 (1995)
- [7] 田中浩也, 渡辺ゆうか: デジタルファブリケーションとSDGs, KEIO SFC JOURNAL Vol.19 No.1, pp.28-61 (2019)